

介護 ビジョン

JAN. 2016

定価 1,296円

特集

介護のパラダイムシフト

若手起業家

7人 の新戦略



松田大策

(株式会社はなケア代表取締役社長)
ヒトにフォーカスした「雰囲気づくり」で
50年盤石な組織に



下河原忠道

(株式会社シルバーウッド代表取締役)
今の介護施設は「綺麗な牢屋」
管理から脱することが大切



神山晃男

(株式会社こころみ代表取締役社長)
ターゲットと需要を自ら限定せず、
想像力を広げる



菅原健介

(株式会社ぐるんどびー代表取締役)
サーフショップが
小規模多機能を運営してもいい



宮本剛宏

(株式会社ケアリッツ・アンド・パートナーズ代表取締役社長)
「地域密着」を隠れ蓑にせず
スケールメリットを追求すべき



高丸 慶

(株式会社ホスピタリティ・ワン代表取締役)
地域コーディネーターとしての
“コミュニティ・ナース”の時代が来る!



岡 勇樹

(NPO法人Ubdobe代表理事)
人材不足を解決したいなら
「J・F・J」を語るべき

若手起業家7人の新戦略 2

3つのポイント

- 1 業務でなくサポートをする
- 2 地域と支えあう
- 3 開放的にしておく



月に1度はお祭りなどの行事を行い、多くの地域住民と楽しむ

いったことが日常的にあります。月に一度は何かしらのお祭りも行っており、そのときには地域の人が多く集まります。多いときには500人以上の地域住民が集まりました。

こうした取り組みにより、顔の見える関係ができ、地域の人とコミュニケーションを図れるようになりました。これまで、認知症の利用者が外に出ていくことはありましたが、地域の人や子どもたちが「〇〇にいたよ」「△△さん、あっちにいたけど大丈夫」などと教えてくれました。地域の人たちに支えられながら、介護ができています。サ高住が地域の「ハブステーション」となることは、地域住民の安心にもつながります。

管理しながらの自由を提供する

介護業界に参入し4年。サ高住を開設する前に諸外国の介護現場を見てきた下河原代表は、日本の形式や決まりに縛られ、自身が学んできたことを反映できるサ高住という「住まい」の提供にこだわって運営を行っている。

日本には「施設」は十分すぎるほどあると思います。足りないのは、「住まい」です。介護業界に参入するにあたり、諸外国で介護の現場をたくさん見てきました。外国で

は、もう「施設をどんどんつくろう」というところは、少数派です。どの国も、つくっているのは「サ高住」に代表される「住まい」です。「施設」と「住まい」の違いは、管理されているかどうかという点です。施設は管理するために自由を奪ってしまっています。こうした管理は人を無気力にしてしまうでしょう。現在の高齢者施設は「綺麗な牢屋」に見えます。すべてが管理され過ぎているのです。

当社のサ高住「銀木屋」はあくまでも「住まい」であり、そこには入居者の意思があります。入居することも入居後の外出も、食べるものや時間も自由です。はじめは、出入りを自由にすることに職員も不安を抱いていました。特に介護施設での勤務経験のある職員には止められました。しかし、私にとって出入りの制限は「不自然」に感じられたのです。

出入りを自由にするためのリスクはあります。そのため、入居時にしっかりとご家族にもご本人にも確認をとり、書面にもきちんと残しています。

いつも開いている状態にしたところ、はじめは多くの入居者が外

に出て行きましたが、今では「いつでも出られる」という安心感から出て行くことが減っていきまし。高齢者に限らず、管理されればされるほど、窮屈に感じて、そこから抜け出したいと思うのは人間の性です。

出て行けない環境が、出て行くことを助長しているのです。出入りが自由な状況は特殊でしょうか。私は当たり前だと思います。経営するうえでこの当たり前という感覚を常に大切にしています。

高齢者施設には、つまらなそうな表情の人が多くいます。入居者も職員も、あまり楽しそうにしている印象はありません。もっと自由に生きれば表情も自然と明るくなります。

今後は、その人が望む生活ができる「住まい」がもっと増えてほしいのではないのでしょうか。管理やケアといった上から目線の言葉を使っているのは、介護業界に変化は起きないでしょう。介護の本質は要介護状態にしないことだと思います。元気になる、楽しくなるような場所をもっと提供していく方法を考えていくべきです。



株式会社シルバーウッド 代表取締役 下河原忠道
しもがわら・ただみち
1971年、東京都出身。92年より父親の経営する鉄鋼会社に勤務。98年に単身渡米。帰国後2000年に株式会社シルバーウッドを設立。05年、高齢者向け住宅工事の受注を機に、高齢者向け住宅・施設の企画・開発事業を開始。11年7月サ高住「銀木屋<鎌ヶ谷>」を開設。現在、銀木屋シリーズを6棟直轄運営。一般財団法人サービス付き高齢者向け住宅協会理事

介護職としての専門性を意識しよう

下河原代表は、入居者のその人らしい生活と最期を支えることこそが介護と考えている。そのため「看取り」にも力を入れており、これまでに1施設につき20人以上を看取ってきた。

介護職が、他業種に対して専門性や存在意義を主張できないのは、「業務」に追われ、介護をしているという実感が薄まり、自信を

なくしているからではないでしょうか。

介護施設では、さまざまなことが入居者本人の意思とは別に規則で決められています。食事一つをとっても、食べる時間や形態、食べ方などです。「銀木屋」はサ高住という「住まい」なので、本人が食べたいものや食べたい時間など、その人の要望に合わせて提供しています。

介護とは、その人の生活に寄り添い、本人ができない部分をサポートすることです。介護という「業務」をするのではなく、生活の

今の介護施設は「綺麗な牢屋」管理から脱することが大切

株式会社シルバーウッドの下河原忠道代表取締役は「施設」ではなく「住宅」をつくることにこだわり、入居者を管理しないサ高住「銀木屋」シリーズを運営。介護業界の型に捉われない介護を展開する。

「サポート」をするのだという意識が必要で、介護職が、その人の望むことをサポートしていると実感できれば、他職種と同様に自信を持って存在意義を主張していけると思っています。

このサポートは何も通常の生活だけではありません。看取りにおいてもサポートができます。私自身、過度な医療により平均寿命が延びている現状に疑問を感じています。そのため「銀木屋」では延命治療をしない方針を打ち出し、それに共感した人が入居しています。入居時に終末期の意向を聞いておくこと、その人の望む最期をサポートできます。終末期でも治療を優先しがちな医療とは違う役割を介護職は果たせるのです。これが介護職の専門性です。

専門性は認知症ケアでも発揮できます。認知症は薬の量を増やせ

「サポート」をするのだという意識が必要で、介護職が、その人の望むことをサポートしていると実感できれば、他職種と同様に自信を持って存在意義を主張していけると思っています。

このサポートは何も通常の生活だけではありません。看取りにおいてもサポートができます。私自身、過度な医療により平均寿命が延びている現状に疑問を感じています。そのため「銀木屋」では延命治療をしない方針を打ち出し、それに共感した人が入居しています。入居時に終末期の意向を聞いておくこと、その人の望む最期をサポートできます。終末期でも治療を優先しがちな医療とは違う役割を介護職は果たせるのです。これが介護職の専門性です。

専門性は認知症ケアでも発揮できます。認知症は薬の量を増やせ

「銀木屋」には駄菓子屋を併設し、建物自体が出入り自由ということもあり、子どもたちが駄菓子を買いきたり、宿題をしにきたりとい